International Exchange 広がる国際交流の輪

日本歯科大学新聞

東京千代田区富士見
日本歯科大学新聞会
発行兼編集人　中原　泉
発行日　偶数月末日
定　価　1部10円
編集室　〒951-8580
新潟市中央区浜浦町1-8
☎025（267）1500

本学のシンボルマーク

姉妹校 学生たちが来校

海外の大学との姉妹校連携は台湾の中山医学大学から始まった。これは同大学の創立者周汝川先生（故人）が本学第二十九回卒業生であることから、一九七一年に当時の中山医学専科学校と提携した。以降、昨年、オーストリアのダヌーベ・プリバード大学と締結して、姉妹校は十六カ国、十八校となった。

本学の国際交流活動は、学術上の意見交換や共同研究による歯科医学の発展と他国の歯学部学生との交流によって視野を拡大することを主なる目的としている。

各国の異なる歴史、独自の文化、環境のもとでは、人間の発想も異なってくるが、姉妹校との交流は研究・教育面で大きな役割を果たしてきた。本学からは多数の教員が姉妹校に滞在して研究成果をあげている。

また本学が受け入れた研究者も多数にのぼり、滞在中に両学部で行った共同研究により、多くの研究論文が国際学術誌に掲載されている。

本年もタイのマヒドン大学からは三月に訪問学生が、七～八月には短期留学生が来学した。また例年通り中山医学大学、ブリティッシュコロンビア大学（UBC）からは交換学生が訪れ、イギリスのマンチェスター大学（UM）からは初めて二名の学生が来訪した。

姉妹校からの訪問学生、交換学生たちは、東京と新潟の両キャンパスで研修し、UBCとUMの学生たちは新潟で民謡流しや花火大会を楽しんだ。

東京では附属病院で患者ロボット・シムロイドでの臨床実習を体験し、東小金井の多摩クリニックで口腔リハビリテーションの実際を見学。また新潟で中山医学大学の学生たちが訪問歯科診療に同行したことは、地元紙の「新潟日報」にも大きく取り上げられた。

関本恒夫新潟生命歯学部長を囲んで
マンチェスター大学（前列左から2，3番目）、ブリティッシュコロンビア大学（UBC・右側）と本学の学生たち

多摩クリニックで研修するUBC学生（後列）

大隅客員教授がノーベル賞

東京工業大学の栄誉教授で、本学客員教授の大隅良典先生は、二〇一六年度ノーベル医学生理学賞を受賞した。

生命歯学部微生物学講座の大隅客員教授は、オートファジー（自食作用）の仕組みの発見により、細胞自身がその一部を分解して、リサイクルや新陳代謝していく根源的な生命現象の謎を解明した。

大隅先生は平成二十五年本学生命歯学部で、「あの大隅良典博士にmotive force をもらう」と題するオートファジーの講演を行った。

2017年歯髄細胞バンク講習会

本学では明年二〇一七年の七月～十二月の日曜日に、歯髄細胞バンク認定医講習会（第二期）を開催する。昨年八回開催した第一期講習会には、多数の本学校友会員が受講して認定医として登録した。

第二期講習会は受講者を本学校友会員だけでなく、他大学卒業の歯科医師も対象として、生命歯学部富士見ホールで四回にわたり開催する予定。（日程は次号に掲載）

日本歯科大新潟病院

台湾の学生が研修

訪問診療 熱心に見学

台湾の中山医学大学で歯学を学ぶ学生が日本歯科大学新潟病院（新潟市中央区）を研修のために訪れている。18日は訪問歯科診療に同行し、口腔ケアや治療について学んだ。

中山医学大は台中市にある私立の医療系大学。創立者が日本歯科大の卒業生であることが縁で姉妹校協定を結び、教員や学生の交流を続けている。

研修はほぼ毎年行われ、今回は6人が今月3～25日に本県に滞在。各診療科を回り、治療現場の見学やシミュレーターを使った実習などに取り組んでいる。

日本歯科大によると、台湾で訪問歯科診療はあまり普及していないという。

18日は学生2人が訪問歯科口腔ケア科の医師らと新潟市西区の特別養護老人ホームを訪れ、入所者への口腔ケアや抜歯などを見学した。学生はスタッフから器具や診療の流れについて説明を受けながら、熱心に治療を見守っていた。

劉立偉さん(23)は「訪問診療での抜歯などはほとんど見る機会がないので驚いた。とても勉強になった」と話した。

訪問歯科診療の様子を見学する中山医学大学の学生＝18日、新潟市西区

▲新潟日報10月19日号（朝刊24面）新潟日報社提供

畑名誉教授叙勲

本学名誉教授の畑好昭先生は、平成二十八年秋の叙勲で瑞宝中綬章を受章された。

畑名誉教授は昭和三十七年本学卒業（第五十一回卒）。同年十一月歯科補綴学教室助手、講師、助教授を経て、五十一年教授に就任。新潟生命歯学部の創設期から平成十九年二月まで三十余年にわたり歯科補綴学第二講座を主宰した。

最先端の歯科医療をシミュレート

東京 附属病院で中・高校生が職場体験実習

鹿児島県立甲南高等学校

お口を大きく開けてください

本の壁・図書館も見学しました

東京の附属病院では、中学・高等学校からの依頼により、病院見学や歯科医師体験実習を受入れている。

本年度はまず、鹿児島県立甲南高等学校から二年生六人が、修学旅行における職場体験実習のため六月十五日に来院した。これは同校の卒業生である小児歯科の楊秀慶講師（八十一回卒）が在職していることから依頼があり実現したもの。

当日は生命歯学部の本館校舎において、第四学年の小児歯科学講義を楊先生が担当していたため、在校生に混じり授業を聴講。その後、臨床実習室でスキルラボ運営部会の宮下渉講師の指導により、ヒト型患者ロボット・シムロイドを用いた実習を行った。生徒たちは人間そっくりのシムロイドに驚きながらも、歯面清掃実習に取り組んだ。

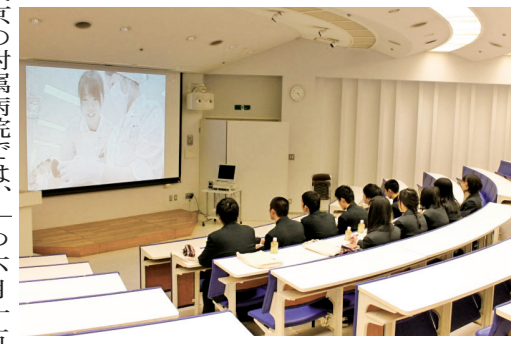
その後の病院見学では診療室の見学のほか、放射線検査室において岩田洋講師による歯科用CTの説明を受け、鮮明な画像に目を輝かせた。

八月四日には昨年に引き続き東京都市大学付属中学校三年生七人が、キャリアスタディー企業研修で来院。当日は鈴木病院事務部長の案内で、生命歯学部図書館の見学に始まり、総合診療科の北村和夫教授の講義、病院見学、スキルラボ運営部会員によるシムロイドを使ったコンポジットレジン（CR）修復や石膏模型作製など盛り沢山のメニューをこなした。

十月十二日には広島県立呉宮原高等学校から二年生十一人が、修学旅行における進路探求の一環として来訪。滞在時間が短く限られた時間であったが、大学案内のビデオを用いて安藤文人准教授が、本学の教育システムを紹介後、本学五年生が臨床実習に臨んでいる総合診療科を大澤銀子准教授が案内した。

また、スキルラボ室ではシムロイドを見学。同室のシムロイドは老齢者モデルを設置しており、まさにヒトと見間違う姿に、最先端の医療技術に感動したと感想が述べられた。

広島県立呉宮原高等学校



両学部での授業と大学紹介のDVDを見る

東京都市大学附属中学校

附属病院の玄関前で記念撮影

スキルラボ室で病院スタッフとともに

診療用の顕微鏡を覗いてみました

このように、附属病院では生命歯学部と連携を取りつつ、歯科体験により歯科医療の現状や本学の歯科医学教育を紹介している。将来歯科医師になりたい、と思う生徒が増えることを願っている。（附属病院事務部長 鈴木洋一）

新潟病院でも職場体験

市内 高志中等教育学校の生徒が7回目

新潟病院では職場体験学習を平成十四年から始め、新潟市立高志中等教育学校からの職場体験学習は、今回で七回目となる。七月十九・二十日の二日間の体験学習について、担当者からの内容説明があり、体験前の事前アンケートを行った。アンケートでは、医療の現場を将来の自身の仕事と考えている生徒が多くいた。その後、本学の新潟病院、医科病院についてスライド等用いて説明し、今回の体験学習を担当したのは、黒木大雄講師（矯正歯科）、長谷川優講師（歯科矯正学講座）、三瓶素子講師（小児歯科）。

二日間の職場体験では、普段体験できない病院のバックヤード見学、医の博物館、放射線機器、院内薬局、顕微鏡診療等の見学を行い、口腔外科医との職業面談、実際の器具機材を用いた体験（救急蘇生法、診療室での人工歯切削とレジン充填体験、歯科技工科での義歯人工歯配列、光重合レジン操作等）を行った。

また、最終日には院長面談の時間を設け、山口晃新潟病院長と、体験学習を通しての質問や感想、医療人として備えるべき資質、超高齢化社会の日本において、これから必要とされる歯科医師像などについて自由な質疑を行った。

今後の進路選択の一助になるとともに、歯科に対する興味を持ってもらえればと期待している。（新潟生命歯学部院務部長 白藤一彦）

▶技工実習も体験

松崎助教（附属病院小児歯科）優秀論文賞

附属病院小児歯科の松崎祐樹助教は、去る五月二十六日、一般社団法人日本小児歯科学会の平成二十七年度小児歯科学雑誌優秀論文賞を受賞した。

受賞論文は「気管挿管が原因と考えられた上顎乳前歯の萌出不全の一例」で、二〇一五年二月発行の『小児歯科学雑誌』五十三巻一号に掲載された。（写真＝中央は表彰状を手にする松崎助教、右は内川喜盛小児歯科教授、左は白瀬敏臣小児歯科准教授）

1948年6月 本紙第2号

日本歯科大学新聞第二号は、昭和二十三年（一九四八）六月十五日に発行された（三面に掲載）。発行人は鈴木弘二先生（三十九回卒）で、当時は日本歯科医学専門学校の三年生だった。

同年四月に発行された「日本歯大新聞」創刊号の論説「女子学生に寄す」に応えるかたちで、大澤迪子さんが「一年生の感想　求めたいもの」を、江俣嘉世子さんが「随筆　美と真の花園を夢見る」を寄稿した。平成二十五年に逝去された江俣嘉世子先生は三十九回卒で栃木県で開業されていた。大澤迪子先生は四十一回卒で、埼玉県でご健在である。

昭和二十二年春の第一回歯科医師国家試験、秋の第二回国試に続いて、二十三年の春には第三回国試が実施された。六十八年前の本紙第二号には「国家試験の筆答試験問題」や「解答要領」が掲載されている。歯科補綴学教授の杉崎壽先生の「実地試験の成績を見て」とともに、「春雷」と題したコラムでは、次のような記事が掲載されている。

＊＊＊

「春雷」

先日の国家試験の時、試験委員の某氏が受験者の診断時の消毒に就いて、余りにも細菌学的常識に乏しいと題してしゃべったとか、しゃべらないとかいう話の中に、こんな一節がある。

患者に接した後の手指の消毒の際、其儘手指を消毒液に漬けた人が多いが、此では口腔内の汚物や血液膿汁等で、忽ち消毒液は汚れて消毒力を失ってしまう。先ず水で機械的に洗った後に消毒液に漬けるべきだ。

此を聞いて私は私の細菌学の常識とは全く違うので驚いた。ほんとに試験委員がこんな事を云ったとしたなら一大問題だし、又誤聞にしてもこんな方法が正しいとして伝えられたりしては大変だ。私は真偽を確かめた上で投稿するつもりで某氏を訪ねたが、折悪く不在であったので投稿を延期するつもりであったが、此の方法が意外に広く行われているらしいので敢て筆を執った次第である。私は此の問題が、単に先輩を非難する言と考えられたりすることは迷惑だ。寧ろ某氏の人柄を仄聞し敬意を抱いてさえいる。唯科学人として、科学的に此の問題を取り上げてみたい。

先ず術後の消毒に就いて述べよう。此の消毒法が誤りである事は細菌学の第一歩を実験された方はよく御解りの事と思う。病原菌の付着した手指を水道で洗う。その結果コック或いは手洗台に菌を散布する。次に其れに触れる人々……考えてみても怖しい場合がある。術後は直に消毒して後所要に応じて水洗すべきだ。（以下略）

日本歯科大学新聞

The Nihon Dental College News Paper

電話 23年6月15日 発行
第2種
東京都千代田区土手町113
日本歯科大学新聞部
発行人 鈴木弘二

歯科機械材料一般
御開業の際は是非当店へ
田中歯科器械店
東京都千代田区富士見町1の3

生徒課自書の第一稿

（われ若き心に綴らくして——）

生徒課　山口　秀雄

第三回歯科医師国家試験

実施に幸を閉つ

自筆診査施行さる

審査あわせて検査人員に三過百名

賀地試験の成績

を見て

第三回歯科医師国家試験問題

第三回國家試験解答要領

学校新聞の使命

「春宵」

随筆

美しい花園を

夢見る

新入生の感想

求めたいもの

アルギンに就て

歯科機械材料

第三回歯科医師国家試験問題

第三回國家試験解答要領

入江歯科商會
人江秀雄
日本学生会材料店
運動具一式販賣
日本野球の店
富士運動具店
御食事は是非
美味本位の弊店へ
中本御食堂
東京都千代田区富士見町一丁目
明石合金製造所
東京都千代田区富士見町一丁目
吉田製作所
東京都千代田区富士見町一丁目
東京プリント印刷所
文京区本郷川町九八番地
電話小石川(867)3314番

是非當店へ
迅速技術優秀
山佐屋洋服店
東京都千代田区富士見町
制服の御用は
是非當店へ
迅速技術優秀
いわしや 歯科器械部
定評アル各種優秀器械類ノ店
器械付属ナ銀器ハ一般ニ是非御下命ヲイタ
常用器械ハ殺菌器品ヲ始特殊器械ノ研磨
目盛ノ正確ナル器具品等ハ科学的ニ研究シ
フルチョン 器械株式會社代理店 ラボラトール
アルボン鋼 同上化学株式會社特約店 ラボレン鋼
株式會社 大熊清報商店
東京都千代田区富士見町

歯科器械部
株式會社
東京都千代田区富士見町
ビヤス株式會社
東京都千代田区富士見町
山田喫茶店
東京都千代田区富士見町
天野理髪店
東京都千代田区富士見町
山田製作所
東京都千代田区富士見町
前澤靴店
東京都千代田区富士見町
日本歯科大学生会
指定店
株式會社
東京都千代田区富士見町
木野歯科商店
東京都千代田区富士見町
ライオン歯磨
株式會社
東京都千代田区富士見町
三雅株式會社
東京都千代田区富士見町
注射器
工藤ポロ製器株式會社
東京都千代田区富士見町
歯科器械
東京都千代田区富士見町

第29回 姉妹校交換学生

派遣と受入れ 総計四〇七名に

羽村章生命歯学部長、菊池憲一郎学生部長と

ＵＢＣでのウェルカムパーティ

東京・レインボーブリッジの夜景をバックに

ＵＷのSadr教授のホームパーティに招かれる

新潟のＢ級グルメ・焼きそばパーティに舌づつみ

日本歯科大学の姉妹校交換学生制度は、学部学生の国際交流の場とし、広い視野と最新の知識を併せ持った歯科医療人の育成を目的として、一九八六年（昭和六十一）より行われている本学独自の教育プログラムである。

毎年三月にアメリカ・ワシントン州シアトルのワシントン大学歯学部（ＵＷ）と、姉妹校であるカナダ・バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学歯学部（ＵＢＣ）を、本学の生命歯学部と新潟生命歯学部から選抜された五学年六名の学生が訪問している。その後、七月下旬にＵＢＣからの訪問学生を東京、新潟に受け入れ、相互に研修と親睦を図っている。

今年の本学一行は、三月五日に両学部の五年生各三名と同行教員一名の合計七名が、不安と期待を胸に秘めて、まずアメリカ・ワシントンを目指した。到着したシアトル・タコマ空港では晴天に恵まれたことで、緊張も少しずつとけて素晴らしい出だしとなった。

六日は日曜日であったため幸運にも研修予備日となり、観光に費やすことができた。学生たちは自分たちで計画をし、自主独立の精神に則って見聞を広げた。また、明日に控えたＵＷ訪問に向けて、夜遅くまで英語での質問内容を確認しあう学生たちを見ていると、心強く感じた。

翌七日はＵＷ歯学部を訪問し、午前中は Restorative Dentistry のActing Associate Professorであるる Alireza Sadr教授の案内で研究室、学生実習室、院内歯科技工室、歯科病院診療室を見学した。昼食時間になると、Daniel Chan教授が日本にゆかりのある学生たちを集め、恒例のピザランチとなった。本学学生も昨晩に整えた質問を中心に積極的な交流を行い、充実した時間を過ごした。夜は Alireza Sadr教授のはからいで、ホームパーティーに招待していただいた。Sadr教授夫妻は、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科口腔機能再構築顎講座う蝕制御学分野にて学位を取得したことからも、若干の日本語を理解することができ、かつ世界中様々な場所の歯科事情を熟知しているため、学生たちは自分たちの将来について様々な質問を投げかけ、その議論は夜中まで続く白熱したものであった。

▶日本では体験できないアマルガム実習

次の日は早いもので、いよいよバンクーバーへの移動となった。夜遅くの到着にも関わらず、空港出口では、ＵＢＣ国際交流責任者の Ravindra Shah先生と受け入れ学生たちの熱い出迎えを受け、その晩は学生宅での歓迎会となった。バンクーバー滞在中はすべての訪問者に対して担当バディが割り当てられ、全員それぞれの住まいにホームステイさせていただいた。滞在先ではＵＢＣ学生とそのご家族から、家族同様の素晴らしいおもてなしをいただき、とてもお世話になった。

翌日からは病院での講義や臨床実習、グループワークに参加させていただいた。研修の合間には、ＵＢＣキャンパスの見学や、バンクーバー市内観光、ウィスラーでのスキーなどカナダを満喫することができた。十八日の早朝、ＵＢＣ学生たちの見送りをうけ、約二週間に及んだ交換留学はトラブルなく帰国を迎えた。

帰国後、四カ月が経過した七月二十五日、今度は我々、日本歯科大学が迎える時が来た。ＵＢＣメンバーは希望を胸に、全員仲良く同じ飛行機で成田に来日し、まずは東京での一週間の研修を受講して、新潟に移動後、さらに約一週間の研修を行った。

東京・新潟ともに学部内の施設や研究室、附属病院の各科をつぶさに見て回り、カナダとの違いに驚いた様子であった。また、ディズニーランド観光や秋葉原、新潟祭りなどの様々な日本文化にふれあい、多くの経験を積んでいた。

両校の学生が互いに過ごした時間を合計すると、約一カ月となっていた。最初は緊張気味であった学生たちも、互いのことを理解するのに十分な時間を過ごすことができ、本当の意味での国際交流がなされていたと感じている。今回の交換留学で、学生たちは見聞を広げたのみではなく、生涯にわたる素敵な出会いを経験したことで、国際色豊かな感性と柔軟な思考を併せ持った歯科医師として、将来の歯科界を支えることのできる人材となるであろう。

最後に、姉妹校交換プログラム実施にご尽力いただきました関係各位に、心より御礼を申し上げます。

（同行教員　新谷明一）

Aliereza Sadr教授の案内でＵＷ施設見学

新潟での定番、浴衣姿で民謡流しに

ＵＢＣのShuler歯学部長を訪問

中原市五郎先生像の前で記念撮影

ウィスラーの冬季五輪モニュメントで

交換学生

二〇一六年度姉妹校交換学生は次の通り。

（日本歯科大学）
生命歯学部　高橋　賢
　　原　新子
　　横内　里帆
新潟生命歯学部
　　川木戸英理
　　多田　早織
　　吉竹　高志

（ブリティッシュ・コロンビア大学）
Ms. Anne Fang
Mr. Anuj Bahri
Mr. Dylan Olver
Mr. Janson Lee
Mr. Jordan Cheng
Mr. Spencer Lin
Mr. Varun Saran

（同行教員）
新谷明一（生命歯学部歯科補綴学第二講座准教授）